

論文の概要および審査結果の要旨

氏名（本籍）	象 本（中華人民共和国）
学位の種類	博士（文学）
学位記番号	甲第96号
学位授与の日付	平成30年3月18日
学位授与の要件	佛教大学学位規程第5条第1項
学位論文題目	菩薩藏經の梵漢藏四本対照研究
論文審査委員	主査 松田 和信（佛教大学教授） 副査 小野田 俊蔵（佛教大学教授） 副査 下田 正弘（東京大学教授）

〔1〕論文の概要

象本氏の学位請求論文は、漢訳では宝積部第12經の『菩薩藏經 (*Bodhisattvapiṭaka-sūtra*)』に対する文献学的研究である。中国チベット自治区ラサのポタラ宮に、インドからもたらされた同經の原典となる梵語（サンスクリット語）貝葉写本が保存されていることが近年明らかとなり、現在校訂テキストの出版を目指す国際的な共同研究が行われているが、象本氏はいち早く未出版の梵語テキストの使用を許され、漢訳2本および西蔵語（チベット語）訳との比較対照研究を行った。その成果が本論文である。『菩薩藏經』は玄奘三蔵がインドから帰国後、最初に漢訳した梵語文献として知られているが、これまで梵語原典が未発見であったことと、『法華經』の約二倍の文字量を有する長編經典であることも相俟ってか、大乘仏教研究に豊富な資料を提供する重要文献であるにもかかわらず、ほとんど研究が行われていなかった。象本氏は『菩薩藏經』の数少ない先行研究を紹介して、本論の目的と内容に簡単に触れて序論を終えた後、7章を費やして『菩薩藏經』を分析し、さらに付録2編を付して本論文を結んでいるが、7章と結論の概要を章毎に紹介すれば以下の通りである。

第1章《梵藏漢四本の經名》『菩薩藏經』序章奥書の *bodhisattvapiṭakaṃ nāma sūtrāntaṃ* という語と、經末奥書の *bodhisattvapiṭakaṃ nāma dharmaparyāyaṃ mahāyānasūtram samāptam* という表現から、本經の經名として *Bodhisattvapiṭaka-sūtrānta* あるいは *Bodhisattvapiṭaka-dharmaparyāya* が使われていることを指摘し、『開元釈教録』『大唐大慈恩寺三蔵法師伝』等の中国の經録において、玄奘訳の經名が『菩薩藏經』や『大菩薩藏經』などとされる理由を考察している。さらに第二の漢訳である宋代の惟浄・法護訳とチ

ベット語訳の経名および訳者についても考察している。次に「菩薩藏」の概念を、十二分教、一切法、六度、三宝、無上正等正菩提等の諸概念と比較し、さらに實叉難陀訳『大方廣佛華嚴經』に菩薩藏の十義が説かれることを指摘し、経名である「菩薩藏」という用語の歴史的展開とその意味について検討している。

第2章《梵藏漢四本の関係》四本の章立てを表で示して、四本それぞれが異なる章立てを有することを明らかにする。次に、梵語語写本にのみ存在する内容と、各章に見られる相違点から、四本が別本であることを指摘する。第12章「大自在天授記品」における四摂法の布施に関する文章の異同から、玄奘訳を除く三本は近しい系統に属するものであるが、玄奘三蔵が用いた梵語語原典は、ポタラ宮の写本および宋訳とチベット語訳が用いた原典より古層に属することが明らかである。同時に第5章「慈悲喜捨品」の中で、梵語写本、宋訳にのみ存在する内容があることから、ポタラ宮と宋訳が用いた原典は他の二訳が使った原典より新層に属するものであることも判明する。また「菩薩觀察品」等の五章の内容分析から、ポタラ宮の梵語写本は宋訳が用いた原典よりさらに新層に属するものであると分析する。

第3章《菩薩藏經の内容》まず、經典の全体構造について考察する。『菩薩藏經』は、序分、正宗分、流通分という三つに分かれる。修道論の観点からは、本經の教説は「解脱の道」と「成仏の道」に分類できる。序分を構成する第1章「家主品」で賢護を始めとする五百の在家者たちに説かれる教説を「解脱の道」に分類し、正宗分である第3章「菩薩觀察品」から第12章「大自在天授記品」（ただし流通分の内容を除く）までに説かれる「菩薩藏法門」の内容を「成仏の道」に分類できる。さらに、第1章で説かれる「解脱の道」の仏説を四諦の視点からまとめる。同時に、正宗分で説かれる「成仏の道」の教説を願・信・行・果の四項にまとめる。また本經に現れる「虚妄分別 (abhūtaparikalpa)」の意味を分析して、それと非如理作意および十二縁起の関係を明らかにする。

第4章《菩薩藏經と他經との関係》『菩薩藏經』と他經との関係について、序分の内容、次に正宗分の内容を他經との関係から検討する。まず、序分としての前二章が、大乘經典として、本經が独創的な内容を持つことを明らかにし、次に、本經の「菩薩藏法門」の内容と『大集經』「無尽意菩薩品」における「無尽法門」の内容比較から、両法門には一致あるいは類似点が非常に多いことを指摘し、さらに両法門に見られる慈と慈無尽の内容が対応する例、および布施波羅蜜多と布施無尽との対応例を挙げて、両者の関係について、内容も順番も対応しているタイプと、内容が部分的に対応するが順番が対応しないタイプの二つに分類している。このように両者がどのような影響関係にあるかを検討した結果、本經の「菩薩藏法門」は『大集經』「無尽意菩薩品」の「無尽法門」をもとに新たに作成された可能性が高いことを指摘する。さらに、第5章「慈悲喜捨品」における「悲無量心」中の「十種大悲無量」と、『大集經』「陀羅尼自在王菩薩品」における「修集大悲十六事」との対照、および同章における「十種大悲轉相」と『大集經』「無尽意菩薩品」における「大悲無尽」との対照より、本經が『大集經』「陀羅尼自在王菩薩品」と『大集經』「無尽意菩薩品」の二者から素材を取り入れてはいるものの、同經に基づかない独自性も見ら

れることを指摘する。次に、第4章「如來不思議品」における「如來の光明不思議」の内容と、伝統的な仏教教団が伝えた大乘仏教以前の『起世經』「三十三天品」の内容比較から、『起世經』も本經創作のソースの一部となった可能性を示す。さらに第12章「大自在天授記品」と、法藏部教団の『四分律』「受戒捷度」および所属教団不明の『増一阿含經』「馬血天子問八政品」の三者それぞれに見られる燃灯仏授記物語の比較から、『四分律』と『増一阿含經』も本經創作のソースとなった可能性を示している。さらに第2章「金毘羅藥叉品」については『増一阿含』との関係も明らかにしている。これによって、本經の創作者は、伝統的教団を代表する説一切有部教団の知識もあり、法藏部あるいは大衆部教団の知識もあった、つまり単一の伝統教団の知識に限定されないことを指摘している。

第5章《漢訳菩薩藏經の特徴》漢訳とチベット語語訳の傾向および不適切な訳語について検討している。まず、玄奘訳と梵語テキストを対照し、玄奘訳には部分的であるものの加筆箇所があることを指摘し、それを一覧表で示している。次に、玄奘訳に登場する「四無量波羅蜜多」という概念に対する分析を行って、玄奘三蔵が原文の *maitrīpāramitāsu*（女性形複数処格）を誤読したことが、玄奘訳独自の概念形成の原因となったことを指摘している。さらに、宋訳にかかわった2人の訳者のうち、惟浄の訳は直訳的な傾向を持つこと、法護の訳は恣意的な翻訳や省略が見られること、さらに藏訳が極めて直訳的な傾向を持つことを指摘する。

第6章《菩薩藏經「布施波羅蜜品」に見られる施者》第6章「布施波羅蜜多品」で説かれる布施の施者は在家あるいは出家いずれの菩薩であるかについて分析して、所施物の内容から、その施者が在家菩薩であることを主張する。挙げられている施物の内容は四阿含や仏伝文献といった伝統教団系の資料に見られるものであると指摘し、さらに漢訳四阿含に見られる施物を施す者が在家菩薩であるということから、本章に説かれる施者も在家菩薩であることを推定した。さらに第6章が在家菩薩の実践する仏法を説いていて、在家菩薩の出家を促す性格を持つことを指摘している。

第7章《菩薩藏經に見られる出家主義的性格》本經第1章においてブッダは賢護等の在家者五百人に自己の出家の原因を示して、苦から解脱するための教えを説く。さらに五百の在家者達が世尊の勸化で出家して阿羅漢になることを説く。次に、本經の正宗分も、家と家族を惜しまないこと、婦人・妻を敵視すること、出家と梵行を成仏の前提とすること、阿蘭若住をアピールすることといった点から、正宗分が出家主義的性格を持つことを指摘している。

結論 『菩薩藏經』の編集經典としての性格、經名に見る素朴さから神聖化への展開、菩薩藏とその因となる菩薩の「上求下化」の特質、解脱の道（声聞道）から成仏の道（菩薩道）への展開、編集性と独創性の共存、出家主義的性格などの点より『菩薩藏經』に対する本研究で得られた知見をまとめている。

さらに本論文では、付録Ⅰとして、第1章から第4章、第11章から第12章の計6章について梵蔵漢4本の異同が一覧表で示され、付録Ⅱとして、『菩薩藏經』と『大集經』「無

尽意菩薩品」の対応例がすべて諸本対照で提示されている。

〔2〕 審査結果の要旨

本論文は、従来、重要な大乘經典のひとつとして注目されながらも、漢訳2本とチベット語訳のみを資料として限定的な範囲で研究がなされてきた『菩薩藏經』について、恐らくは紀元9世紀に書写されたと思われる新出の梵語写本から作成されたテキストをもとに、地道な梵語原典の読みと関連文献のていねいな調査によって、經典の内容を解明しえた、学位請求論文としては画期的研究であるといえる。著者の象本氏は、梵語テキストを中心に置きながらも、漢訳2本とチベット語訳テキストの意義をも同等に認め、これら4本を詳細に照合しつつ、『菩薩藏經』の内容を把握することに努めている。そのため、各主題における考察は厚みを増し、それだけ信頼のおける成果に至り着いている。テキスト照合のさい、諸テキスト間にみられる微細な構造の相違に注目し、そこに『菩薩藏經』全体の編纂過程を予想しつつ内容の分析を進める手法は、異訳が存在するテキストを研究する方法として妥当なものである。象本氏は、混沌とした内容に映る歴大な分量の梵語テキストを丹念に読み解き、その結果、『菩薩藏經』が六波羅蜜と四無量心を核心に据えつつ、伝統的仏教教団の教義から菩薩道あるいは菩提道の教義へと段階的に推移する構造の中に、先行して存在する大乘經典の『大集經』を構成する「無尽意菩薩品」あるいは「陀羅尼自在王菩薩品」に説かれる素材をまとめ上げた集成經典であるという、明確な見通しに至り着いた。さらに『菩薩藏經』の創作者・編者は大乘文献に止まらず、『起世經』『四分律』『増一阿含經』といった伝統的教団文献への造詣を十二分に持ち、それらの文献類も本經の成立に寄与していることを指摘している。素材をまとめ上げた「声聞地」から「菩薩地」へと展開する構造を持つ瑜伽行派の『瑜伽師地論』を想起させるかのような、注目すべきこの結論は、伝統的仏教經典と大乘仏教經典との関係の考察にも、あらたな光を投げかけてくれるものとなるだろう。

『菩薩藏經』に対する先行研究では、『大集經』「無尽意菩薩品」と『菩薩藏經』のいずれが先行するかが問題となっていたが、象本氏は本論文で『大集經』「無尽意菩薩品」が先行するとの結論を提示している。これは梵語テキストという新たな資料が加わったことで、諸文献の比較対照がより明確化され、細部まで正しく分析ができたことが大きい。この結論も合理的なものであり、新たな研究成果である。いずれにしても『菩薩藏經』が様々な經典を集成し、そのタイトルからも分かるように、既存の伝統教団の三蔵（仏教聖典の集成）に対峙する大乘仏教の三蔵の編纂を目指して作成された經典であると見なしうることも本研究の結果として特筆してよいであろう。

ところで、この10年は、チベット自治区に保存されてきた梵語写本の研究が進み、写本自体も影印版によって続々と公刊されつつある。代表的なものはラサの西藏社会科学院貝葉写本研究所の『西藏自治区珍藏貝葉經影印大全』全61巻（2011年3月刊）であるが、数セットの印刷にとどまって門外不出とされ、残念ながら現時点では、中国国内の研究者もアクセスできない状況にある。世界の研究者は現在ではこれ以外の様々なルートを利用して写本にアクセスし、解説を国際的な協力のもとで進めているが、これによって今までは不明であった訳経事情や書写系譜について新たな見地を開くことが可能になりつつある。特

にポタラ宮に保存された梵語写本の目録はルオジャオ（Luo Zhao）氏によって作製され、北京の中国チベット学研究センター（蔵学研究中心）には相当数の写本原本の紙焼き写真が存在する。象本氏が使用を許されたテキストも、蔵学研究中心の写真から作成されたテキストのひとつである。これによってチベット語訳から類推するだけであった原テキストの姿の一端が明らかになったのである。チベット語訳經典の立場から考えると、なぜ個々の梵語がそのようにチベット語訳されたのかという問題は、対応する梵語写本の単語や構文から考察してはじめて確定されるものであり、逆にチベット語訳から考えて始めて、梵語原典の正確な解説が確定されるということも出来る。さらに本論文は『菩薩藏經』という研究課題の仏教思想的あるいは教理史的進展だけではなく、漢訳された經典群の研究手法に重要な示唆を与える側面を持っていることにも注目すべきである。これは漢文訳の訳出事情や個々の翻訳の特徴を、たとえそれらの訳業の原本より後代の梵語写本であるにせよ、十分に類推の根拠になり得るという事を再認識させるものである。また、著者の象本氏にとって漢文はネイティブな言語ではあるが、その漢文訳の原本と推定される梵語原典やチベット語訳を抜きにして正確な解説は不可能なほど古典文であることも事実である。三種の言語による文献を解説し、相互の関係を考察する中で作業が進められたその点も加味して考えると、この論文が労作であることは疑い得ない。従って、梵語經典の解説が進められる中で、大乘仏教運動を標榜した人々の実像が徐々に明らかにされて行くことが期待される。『菩薩藏經』が持つ二つの側面、すなわち出家主義的要素と布施の奨励という在家菩薩的要素の両者が、どのように起こり、そして展開したのかという問題に梵語テキストの解説は重要な素材を提供することになるであろう。

ただ本論文には今後の課題とすべき点も認められる。象本氏は論文執筆の下準備として『菩薩藏經』全体の梵語テキストを漢訳・チベット語訳と共に解説し、全編の日本語訳を用意しているというが、本論文の全7章で分析された範囲は經典全体に互るわけではない。本論文で取り上げることのできなかった部分に対して、単に翻訳するに止まらずに、同じ分析を行った場合も本論文と同じ結論に至るのかどうかは、象本氏が今後研究を続けて上でも大きな課題となろう。

象本氏は中国佛教協會・中国佛学院より佛教大学に派遣され、日本で梵語とチベット語を学んで本論文を完成させるに至った。象本氏が日本語の研鑽を重ねながら、同時にインド仏教研究に必要とされる語学を身につけることに大きな困難があったことは想像に難くない。このような文献学的な分析を専らとする論文を様々な言語を駆使して執筆することは日本人でも一筋縄ではいかない。来日後、7年近い年月を費やしたとはいえ、日本語でこのような論文を完成させたことは驚異的でさえある。ただ、おもに日本語に関わる表現の問題や翻訳で検討を要する箇所など、『菩薩藏經』の内容分析とは別に、細部に遺されている課題がまだ多くあることも確かである。今後はさらに研鑽を重ねて、最終的には『菩薩藏經』全体のより完璧な日本語訳あるいは現代中国語訳の完成も望みたい。日本語を母国語とする者とは前提が異なるが、そのような不利な条件があったことを一切考慮しなくても、新たな文献資料をいち早く用いて、大きな研究成果を挙げていることは確かであり、本論文は博士（文学）の学位を授与するに相応しいと判断する。